

第70回神奈川県高等学校美術展が無事に開催されました。会場を提供していただいた県民ホールギャラリーを始め、日頃指導に当たられた先生方や保護者の方々には、心より感謝申し上げます。

今回は、102校より総数838点の作品を展示することができました。今回も日々の個々の目標の達成に向けた努力と、持ち前の個性が手に取るように伝わってくる作品が集まりました。特に絵画作品においては、時間をかけて緻密に描きこんだ作品が目を惹きます。そうした作品からは、作者の情熱や苦労までもが伝わってきて、見る人の心を動かします。平面、立体作品とも、全体的に時間をかけてじっくりと取り組んだ成果を感じさせる作品が多く集まりました。その中でも、今回特に顕著な点は二つあります。

一つ目は、立体部門特に彫刻における素材の多様性です。今回の展覧会においても規模の大きなものが多く、それぞれ見応えのある作品が揃いました。今回は、塑造や木彫といった伝統的な表現手法は影を潜め、それに代わって樹脂や発泡スチロール等の身近な素材を使った作品が多く見受けられます。出品数自体の増加に伴い、中でも紙を主材とした作品が増加し、張り子のように造形したり、原型の上に表面処理として紙を貼り込むような手法が多く使われています。素材の幅を広げることで、造形上のボキャブラリーを増やしていくことは良いことです。しかし、それが素材自体の良さや面白さばかりが目を引きようであっては良い作品とは言えません。特に大型作品は、規模が大きくなる分表面処理や仕上げにはより時間をかけて作品の完成度を高めてほしいと思います。そして、立体造形ならではの形態や量感や空間の感動や面白さを、ぜひ大切に生かして制作に励んでほしいと思います。

二つ目は、映像メディア部門の飛躍的な進歩です。まず、年々増加傾向にあった作品数が今年度は顕著に増加しました。それは数の多さだけではなく、内容においても進歩を感じます。例えば、動画の動きもスムーズな再生が可能になり見る人にとってストレスなく鑑賞できるようになりました。また、BGMや効果音の入れ方、クリエイティブなジオラマについても一層の向上が見られるほか、カットの時間配分や構図等においても創意工夫やこだわりを強く感じる作品が多くなりました。このことは、年々機器やソフトそのものの技術的な進歩が大きく関係していることと、普段の美術において動画を題材とした授業が多くなってきていることが要因の一つではないでしょうか。一方で、表したい主題をもとにどのように展開するかといった構成力や映像作品としての説得力にはまだまだ進歩の余地を感じています。スマートフォンを使って撮影から編集まで瞬時にできる今日です。それだけに映像メディア部門は、今後とも一層の進歩と大きな可能性を感じる分野です。

さて、ここからは全体を通しての感想と次年度に向けたメッセージを書かせていただきます。

まず、今回の展覧会に限った話ではありませんが、作品として完成まで至っていないと思われる作品を散見します。それは、時間がなかっただけの問題ではないのかもしれませんが。特に、対象を観察して表すような作品ではなく、自分の中にあるイメージや想像をもとに表すような作品においては、具体化する上で必要な参考資料を十分に集めてみることから始め、完成のイメージをしっかりと持つことが大切です。そして、粘り強く完成までやりきることを心がけて制作にあたってほしいと思います。

次に、次年度に向けた第一歩として、今すぐに行えることがあります。それは、本日ここに集まった作品をじっくりと鑑賞することです。他の作品を鑑賞することから学べることは少なくありません。鑑賞と創作は一体であるといってもよいくらい重要なものです。この機会にぜひ「見て学ぶ」を実行してほしいと思います。

最後になりますが、対象を観察する目や作品を作り出す技術は、一朝一夕で身につくものではありません。岡本太郎氏はこんな言葉を残しています。「人間にとって成功とはいったいなんだろう。結局のところ、自分の夢に向かって自分がどれだけ挑んだか、努力したかどうか、ではないだろうか。」

皆さんがこの美術展に向き合う姿勢や気持ちは、入賞を目指す人もいればそうではなく作品制作を楽しみたい人など、それぞれ違っていると思います。大切なのは、作品に向き合っただけでなくここに出品したことであり、皆さんがこれからも生涯を通して美術やデザインや工芸に親しんでいきたいと思えることです。

今後とも、自分が作り出したいものの実現に向けて、努力を重ねてほしいと思います。